

# 天文学とプラネタリウム

第 97 回



今月のお題

## 暗闇で語る宇宙の姿



視覚情報に頼らず、耳と頭だけで旅する宇宙。そこにどんな宇宙が広がっていくでしょうか。挑戦的な暗闇ワークショップのご報告です。



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)  
平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

天文学の講演と言えば、きらびやかな星の写真がつきもの。銀河系内の星々、色も形も十人十色の星雲、そして銀河。見たことのない深宇宙を理解するのに、このような写真は絶大な威力を発揮します。いやむしろ、ちょっとくらい話が分からなくても写真さえきれいならそれで満足……!?

いや、ちょっと待っててください。その写真は、宇宙のほんの一面を切り取ったものに過ぎません。本誌読者の方なら多くの天体写真が疑似カラー合成されていることをご存じでしょうし、天の川銀河の俯瞰図だって観測に基づいていても研究者が描いた想像図であることには変わりはありません。では研究者や写真家の想像を離れ、あなた自身の想像力で宇宙の姿を描いてみたら、どんな宇宙が広がるのでしょうか。そんな実験的な試みを、「宇宙創造ワークショップ」と銘打って京都の町家「古今燕」で開催しました。

明かりを落とした会場には 25 名の参加者と話題提供の平松・高梨。プレゼンテーションツールは使わず、話だけでイベントを進めます。

まず、夜空に目立つ金星や木星などの惑星を手掛かりにして宇宙の彼方へと想像力をはばかせます。(皆さんもここから頭に情景を思い浮かべながらお読みください。)

地球を飛び出し、月を一瞥して太陽系内側の天体たちを視界に収めます。皆さんなら数字を覚えているかもしれない地球と月の距離、地球と太陽の距離は、いったいどれくらい実感を伴うものでしょうか。そして太陽系の外惑星を超えて太陽系外へ。恒星の間を抜け、さらに飛ぶと天の川銀河の渦が見えます。天の川銀河全体が見えるようになってくると、それ以外の銀河も周りに点々と浮かんでいるはず。銀河は群れて銀河団を成し、銀河団が連なって宇宙の大規模構造となる。ワークショップではここまでを口頭でご紹介し、最後に現代の宇宙観の一つの形として Mitaka を用いてその旅路を振り返りました。

規則的に繰り返す昼夜と惑星の不思議な動きを組み込んだ宇宙観、天体観測器具を使った天体の位置測定とキリスト教的世界観に立脚する宇宙観、望遠鏡によってもたらされた「奥行き」のある宇宙観。それぞれの宇宙観はそれぞれ



畳の間に毛布、障子にはシート。ワークショップ開始前のひとこま。  
このあとプロジェクタも裸電球も消して、暗闇へ。

れの世界で受け入れられ、次の時代・別の土地の勢力によって書き換えられ、現在の宇宙観にまで連なってきました。夜空から始まって宇宙の大規模構造に至るその旅は、人類の宇宙観の変遷をたどる旅とも言えます。現代と将来の天文学は、どんな宇宙の姿を見せてくれるでしょうか。そしてそれをもとにした宇宙観とはどんなものになるのでしょうか。

星とは何か、宇宙とはどんな姿をしているのか。あなたはどこまで宇宙の姿を思い描けますか？